第３回　鳥取市市民自治推進委員会　議事概要

１　日　時　平成２７年9月１８日（金）１０：００～１２：２５

２　場　所　鳥取市役所本庁舎　４階第２会議室

３　出席者

（１）委　員　　福島委員長、佐々木副委員長、吉岡委員、高濵委員、有田委員、景下委員、平尾委員（順不同）　委員出席者７名

（２）鳥取市　　馬場協働推進課長、岡本協働推進課課長補佐、岡田協働推進課主任

（３）傍聴者　　なし

４　議事

（１）　先進的活動団体との勉強会

（委員長）

先進的な活動団体との勉強会ということで、地域の課題、あるいは活性化のために取り組んでいただいているリーダーや実践者の人材養成を目的としたワークショップ型の人材養成塾である「とっとりふるさと元気塾」の取り組みなどについてお話を伺いたいと思う。この元気塾は、市において平成２３年度から施策として実施し、継続して今日に至っているものである。

本日は講師として、とっとりふるさと元気塾の事務局長をされている合同会社コミュニティデザイニング工房代表の藤原一輝さんにおいでいただいた。元気塾で取り組まれている内容やその成果をご紹介いただき、その後、委員の皆さまからお尋ねやご質問があればお聞かせいただきたいと思う。

≪とっとりふるさと元気塾　事務局長　事業説明≫

（委員長）

藤原さんには、元気塾での具体的な取り組み内容、あるいは今まで指導された成果としての成功事例をいろいろとご紹介いただいた。どうもありがとうございました。

せっかくの機会なので、ただ今ご紹介いただいた内容の確認やお尋ね、質問があれば遠慮なくお尋ねいただきたいと思う。

（委員）

１０人足らずでお聞きするには非常にもったいない、有り難い話を聞かせていただいた。ありがとうございました。

私のところは中山間というより山奥だが、去年まで３１世帯あったのが、今年の１月に突然２軒減って２９軒になった。１０年後１５年後は間違いなく半分になる。なぜかというと嫁さんが来ない。娘が３人いてもみんな嫁に出てしまって帰ってこないというような状態である。

嫁さんは来ず、娘は出てしまう。昔みたいに夫婦養子をとってまで跡継ぎをつくろうという気力もない。個人尊重の社会だからだと思うが、今、活動中の塾生になられた方で、今話したような状況の地域に住まれていて、成功して実際に人が来たり、集落が何とか存続できるような状況になっている実例があればお聞かせいただきたい。

（講師）

その課題が実は一番難しく、そんなに簡単ではない。実際に元気塾に関わっている塾生の８割くらいは、それぞれの地域がまだ豊かだが、残り１割２割は、限界集落、消滅集落に近いところである。今言われた成果があるかと言えば、基本的にはまだない。ただ、今年の取り組みに、佐治町の中集落という１２軒の集落がある。今年の初めは１３軒だったが、今は１２軒になり、来年はどうなるか分からない。これが、実は１１月１日の元気塾の課題になっている。ここの課題のテーマが、まさに今言われた地域の存続であり、地域から一番言われているのが、人に来てほしいということである。人が出ていくわけだから当然ながら空き家が増える。いい空き家はたくさんあって、私も住みたいと思うような空き家がある。しかし、そこに来てくださいと単純に言ってもなかなか人は来ない。どこの地域でもその隣に地域があって、地区がある。人を来させるためには、中集落だけのことを考えても、活性化するのはなかなか難しいので、その隣の栃原という集落と、尾際という集落の３つで連帯感を出して、連携してみんなで考える。要は、その地区全体で中集落のことをフォローしていくような関係づくりをまず作っていくことが大事である。

鳥取市でも、空き家バンクといって、いろいろな空き家を紹介している。そのような活動とともに、大阪や東京で移住定住のセミナーが開催されるときに、行政だけではなく、そこに住んでもらいたい人が行って、自分たちが自分のところに来てくれと営業していくぐらいの緊迫感と言うか、真剣さでなければ、人はなかなか来ないと思う。それをそこの中集落だけに任せるのではなく、その周りの集落と一緒に連携させて、連帯感をもつことが一つのポイントだと思っている。それを今度講座でやる。実は、一番難しい講座だと思っている。

佐治のようなところだけの問題ではなく、旧鳥取市で言えば、例えば東郷地区では、どんどん耕作放棄地が増えて、結局作る人がいなくなっている。これも同じことである。だから、持続する地域をテーマにして元気塾をやってほしいと言われたので、それを１１月末にやる。元気塾の講座は、地域の事情に合わせてテーマを持ってやっているので、これから過疎地域などでどうやっていくかということをテーマにして踏み込んでいきたいと思っている段階だが、元気塾で結果がどうだというのはまだないと思っている。

国府町で、最近交流事業に取り組んでいるＮＰＯができた。大体７０歳前後の方が中心になってやっていて、鳥取県で初めて作られた。その人たちも国府を何とかしたいという思いでやられているので、そういう人が出てくれば、過疎地域もまた変わってくると思う。

（委員長）

この元気塾では、地域に出かけて指導されているということを知らなかった。旧市内や合併後の東部地域や南部、西部にそれぞれ出かけられて、出前講座という形で指導されているということを新鮮に聞かせてもらった。それぞれの地域で、おそらく課題などの違いがあるのではないか、あるいはそれに対応していくＮＰＯ法人や地域のコミュニティのみなさんなどの意識の違いもあるのではないかという観点で、リーダーの掘り起こし、地域の課題に向けての掘り起こしのために出前講座をされているのが狙いではないだろうかと思う。そういった地域に出

かけられて、課題解決に取り組む組織や団体、あるいはそのリーダーの掘り起こしや育成のために、人を集められる時の対応の仕方はどのようにされているのか。総合支所といった行政ともタイアップされながら、元気塾の運用を図られているとお聞きしたが、具体的にどのような網掛けをしてリーダーになり得るか、あるいはリーダーのさらなるスキルアップを狙い、網掛けされているのか教えていただけたらと思う。

（講師）

元気塾は始めて５年だが、最初の年は、やはり誰に対して元気塾をやっていくのかということになるので、総合支所や本庁舎の担当者から話を聞くのが最初である。市の担当者は、地域を歩かれている方がたくさんいるので、そういう方にまず地域の事情を聞く。よく見ると、山があり川があり田んぼがありみたいな感じで、どこも変わらないように見えるが、実際に踏み込んでみると、それぞれの地域でいろいろ課題は違う。人間性の違いである。青谷と国府では全然違って、最初はその違いにちょっと驚いたが、同じ鳥取市なのに、まちが違うというのは、考え方が違うのですごく大きい。同様に支所も違う。支所の担当者の考え方も違うので、まずはちゃんとそれをヒアリングする。また、鳥取市は６１の地区公民館があって、その地区公民館にはまちづくり協議会というものがある。そして、地区公民館の館長が事務局長をしている。だから、まちづくり協議会と公民館が基本になるので、そこでも話を聞いた。まちづくり協議会の会長さんは、みなさんよく地域のことをご存知なので、それをずっとヒアリングするのに、３年くらいかかった。本当にそれが去年、今年くらいにやっと分かったうえで、こちらの提案ができ始めたというのが実状である。その中で、毎回毎回顔を見ることで、その地域の方たちと人間としての信頼感ができる。別にこの仕事だからということではなく、元気塾の事務局長という肩書なしでも、自分という人間が行って話をするということは、その人間性を見られる。役所でも同じだと思う。例えば行政の方が担当者だという顔でいくら言っても、その人がどう考えているかを見るので、その人とのやり取りは、やはり私は信頼感だと思う。信頼感のない行政はないと思っているので、そういう意味では、信頼感を作るためにまず話しあいというか一緒に話をするということを基本に続けた結果、その中で息が合うとか、意見に同感するという人は生まれてくる。そういう人に声をかけて、「次また講座があるがどうか」と言ったら、「よし出よう」という人が増え、それが徐々に徐々に１人２人と増えてきた。

去年から、この元気塾の成果報告発表会で深澤市長の名前で認定証を出したが、大体２５０名くらいのリーダー認定ができた。参加している人は４００名以上だが、２５０名ぐらいに認定証を渡すことができた。今年も新たに加わられた方がいるので、何十名かの方に頑張ってくださいと認定証をお渡しする。その認定証に何ら権威もないが、もらったらうれしいと思われるようで、よし頑張ろうということを、みなさんが言われている。

（委員長）

ありがとうございました。

若い人は皆、旧市内のほうに勤めに出たり、子どもの教育のためにも中山間地よりは旧鳥取市がいいということで、残っているのはほとんど高齢者ばかりで、村自体の戸数がどんどん減っている。地域コミュニティも薄れていくが、そういった地域では、なんとかコミュニティも強化していきたいという思いを問題として持たれているのではないかと思う。その地域にしかない特産品や観光資源になり得るような地域の光るものを活用して、交流を図っていこうということに、意外に地元の人が気づいていないという点があるのではないかと思うが、指導され

て、その辺はどのように感じられるか。

（講師）
　その通りで、気づいていない。元気塾では、よく気づきだと言っている。人がやる気になるのはやはり気づかないと無理である。気づかないのに一生懸命やっても自分が何のためにやっているのか分からないわけだから、気づきが全ての基本になっている。だから気づいてもらうための情報を元気塾で出す。１０人いて、その中の２、３人でも気づいてもらったら地域は変わる。あとの何人かはどちらでもない。大体３分の１で物事を考えるのが非常に正しいが、大体３分の１の人から気付きが生まれてくると、不思議と物事は進んでいく。福部の海士などはまさにそれで、福部町の若い人を一生懸命呼びかけようと思って、語る会のようなものを今まで何度かやった。ここは、若い人が多い。でも、実際にこれを推進しているのは、７０歳を少し超えたそこの区長さんである。これがなぜ進んでいるかというと、そういう経験をした地元の高齢者と若い人がちゃんと話す場がある。それが大事なのかなと思う。若い人だけでいくらやってもどこかでぶつかったりする。また、地元の高齢者でやると、高齢者だけで浮いてしまうということがあるから、お互いが一緒に話し合う場を作っていけば、満更ではない。これが生まれたのはそういうことだと思う。そういう意味では、場作り、きっかけづくりを元気塾はしているのではないかと思う。

（委員長）
　ありがとうございました。それから、地域の特産品、特に野菜や果物などに付加価値をつけて、地域への経済的な潤いを持ちたいという地域もあるのではないか。そういったことを考えると、付加価値をつけた加工品の販路、販売も重要だが、そういったものを作る場合には、ネーミングやパッケージデザインが大変大きなインパクトをマーケットでは与えるように承知している。今、いろいろ話を聞くと、以前、仕事でパッケージ等のデザインを専門分野で勉強されていたということだが、そういうことに対する地域のリーダーの方からの相談があったり指導されたりするのか。

（講師）
　すごく多い。講座が３つあったが、一番多いのは特産品と加工品をテーマにしたものである。すぐお金になるし、実際に取り組んでいる方が多い。３分の２とは言わないが大体半分くらいは特産品づくり加工品づくりが好きな人が多い。しかも、作って売れたらお金になる。お金になるというのはやはり地域の元気の源の一つになる。しかし、それで生活するというところまではいかない。生活するとなると大規模農業だとか、ビジネス化しないといけない。こういう小規模の人たちが加工品を作って進めるのは、まず日当が生まれたり、売り上げが生まれたりして、孫にお小遣いが渡せるとか、ちょっと自分の小遣いが増えて、それが生きがいに繋がる。この特産品づくりには、生涯教育がベースにあるんじゃないかと思う。昨日「マドンナ隊」という河原の餅づくりの人のところに行ったら、８０歳ぐらいの人も、６０歳ぐらいの人もメンバーにいる。みんなが一緒に輪になって、和やかにお弁当を食べて、ものづくりしている。それが売れてちゃんとお金になるわけだから、そのような感覚のものが非常に分かりやすいのは確かに特産品かなと思う。私もラベルやデザインで相談された時には、この元気塾の範囲の中でさせていただくようにしている。実際、商品企画もやっている。河原の「やわらか姫もち」というのも皆さんと考えたものだが、その現場の女性たちが考えたネーミングである。これは

なかなかいいネーミングじゃないかと思っている。これからもまだまだ増えてくると思う。

（委員）
　大変勉強になったし、大変興味深く聞かせていただいた。このようなことがあったということは知らなかった。地域の魅力を地域の人が発掘するのではなく、外からだからこそ見えることがあると思うので、そういう力を吹き込んでいただける存在があることを今日知っただけでも良かったと思う。
　一つお聞きしたいのは、これは多分、みんなで相談して、作り上げていく中で地域の連携などは深まると思う。ただ、地域の中心になるリーダー格の中に、その次世代を担うような若いリーダーになれるような方が、入られているかどうかという実態をお聞きしてみたい。

（講師）
　非常にいいところを突かれた。先ほど言ったように、若い人と高齢者がそれぞれの地域におられるが、若い人は働かなくちゃいけないから、なかなか参加しづらい。元気塾でも、どうしても農業されている高齢者だとか､加工品でもリタイアされた女性たちが中心になる｡だから、その若者がどう参画されるかということが一つの大きなテーマである。今年度はそれをテーマにして、いくつか若い人が参加している講座がある。例えばマリンセラピー。マリンセラピーはほとんど２０代の人しか来てない。なぜかというと、サーフィンをやったりヨガをやったりするのは女性である。浜坂から女性が来て、マリンセラピーに非常に興味があったという方が若い人ばかり２０人。それに地元の行政の方やカフェデルマーのマスターなど、経験者が寄って、ここで海の活用のイベントをやろうという形で盛り上がっている例もある。
　それからハーブも、どちらかというと若者が非常に好むテーマで、比較的若い方が参加された。今、委員さんが言われたように、テーマだと思う。テーマによっては、若い人が時間を工面してきてくれる。自分に興味のないものはなかなか参加しづらい。高齢化問題をと言っても自分はあまり関係ないというが、音楽をテーマにしようと言えば来る。アートはと言ったら、アートも結構来る。だから、テーマによって若い人をうまく地域の中に入れさせるというのがポイントだと思っている。
　１２月６日に吉岡温泉の空き家公民館を活用した講座が開かれる。アートというか、公民館活用ということで、この間岩美町で現代美術展があったが、用瀬町で一生懸命活動している地元のアーティストが来てくれたり、地元で因州和紙を使ってアクセサリーを作っている女性が来たり、吉岡温泉にいる自称アーティスト、自称ミュージシャンという音楽をやっている人たちが来てくれて、公民館をどう活用して、地域を活性化させるかということをテーマにしてやっている。それはほとんど地元の若者である。そういう若者にうまく関心を持ってもらうようなテーマから地域を活性化させるということも一つの手じゃないかと思って取り組んではいるが、まだまだ足らないかもしれない。

（委員長）
　本日は藤原さんに何かとご多用の中、貴重なお話を聞かせていただき、本当にありがとうございます。昨今地方創生ということで、国のほうも地域の資源活用、あるいは、そういったものを活用して活性化を図るようにと指導している。そういったことを考えると、地域のコミュニティや資源の活用を積極的に行い、活性化を図っていこうとするリーダーの存在が重要だと思う。鳥取市では国立公園である大砂丘があるが、その砂を活用しての砂の美術館という発想

は、今までの市長にはなかった。そういったものができて、砂丘に来られる方が年間１００万人を超えるようなことも言われる。地域のコミュニティの活性化といったことについて、リーダー育成、あるいはリーダーのスキルアップということで、指導されている元気塾の皆さんは、大変重要な仕事をされていると思う。今後とも鳥取の活性化のためによろしくお願いしたい。本当に今日はありがとうございました。

（２） 協議事項

① 参画と協働のまちづくりフォーラムについて

《事務局説明》

（事務局）

最初に確認させていただきたいことがある。まず主催者についてである。これまで、この市民自治推進員会の委員の皆さんにも、フォーラムの実行委員会の委員ということで、参画していただいている。主催者としては、「参画と協働のまちづくりフォーラム」の実行委員会と、同じ方にはなるが、この鳥取市市民自治推進委員会、そして鳥取市という三者でこれまで開催してきた。この第３回市民自治推進委員会の前に、委員さんから、この委員会がフォーラムの主催になるというのは少しおかしいのではないかというご意見をいただいている。この委員会自体は、鳥取市市民自治推進委員会条例に基づき設置されており、委員会の所掌事務は、鳥取市市民自治推進委員会条例の第２条に規定されている。簡単に言うと調査及び審議というように定められているが、主催者というのは執行機関になるので、そういったものにはなりえないのではないかというようなご意見をいただいた。市としては、委員会の所掌事務の一つとして、「その他自治の推進に関する事項について調査及び審議すること」とあるが、「参画と協働のまちづくりフォーラム」についても、市民活動の紹介やパネルディスカッションも開催してきており、直接市民の方の声も聞くことができるような場になっていたので、鳥取市の自治の基本である鳥取市自治基本条例に基づいた活動の進展なども調査する機会になっているのではないかと考え、主催者として入っていただいたというところもある。この辺は考え方というところもあるので、皆さんから意見をいただき、改めて主催者というところから詰めて、フォーラムに向けて進めていきたいと思っている。

（委員長）

事務局から、このフォーラムについての説明があった。過去の経過が紹介してあるが、このフォーラムは、平成２０年度からやってきたもので、平成２４、２５年度はさざんか会館で市民活動フェスタと合同で開催されている。平成２６年度は、やはり単独でやったほうが好ましいのではないかということで開催したところだが、今までに比べて参加者が少なく、非常に寂しかった。私もそのような印象を持っているが、平成２７年度に向けて事務局で予算要求したが、成果がいかがかという判断だったのか、単独開催は平成２７年度予算では認められなかった。今後の平成２８年度の事業について意見を伺いたい。

その前に、委員さんから単独でやるにしても、この委員会が主催者になるのは、委員会のミッションと違うんじゃないか、かけ離れているんじゃないかという意見が出ている。これが大きな前提になるので、まず、この辺のところからご意見を聞きたいと思う。

（委員）

面倒なことを言うつもりはないが、この委員に応募する前に聞いていた内容と違うと思う。このフォーラムの参画の一員になるというのが不意に出てきたような感じがしたので、委員の募集について、インターネットをもう一回開いてみた。調査審議などというのはあるが、フォーラムを開催するというのはどこにも書いてない。それから平成２０年に市民自治推進委員会の位置づけと役割等という紙が配られていて、そこには参画と協働のまちづくりに関するフォーラムの企画となっていて、実行するとは書いてない。立場上、変なことになると思う。しかも、市長から諮問を受けて答える立場の委員が、中に入って一緒に行動するのでは、やっぱり間を置かないといけないのではないかという気がしたので、そういう意見を述べさせていただいた。

委員が、個人としてフォーラムの中で役割をもたれるということについては、別に妨げも全然ないと思うからいいが、主催として立つのは市の協働推進課ということになるのだろうが、市長部局のどこかが主催して、協働というのはこういうものだから、みんなでやろうと言って市民に呼びかける、そういうものじゃないかと思う。

（委員）

実行委員会を立ち上げて、その実行委員会の中に、自治の推進に関する委員である我々自治推進委員が入るというのは、とても自然なことだと考えたが。

（委員）

個人としてはいいと思う。

（委員）

委員会としての参画ではなくということか。

（委員）

おかしいと思う。

（委員）

議会と市長の関係ほどのものはないと思うが、諮問ということで市長から聞かれて、それに答える立場の者が一緒になってしまったら、委員から見れば自分のすることになってしまう。そうであれば市長も最初から聞く必要もないので、立場を別にしないといけないと思う。企画や助言、調査や審議はいいと思う。しかし、中に入って一緒にするというのであれば、それは個人の立場でやるべきだとう思う。

（委員）

今まで、自治推進委員会の中には市民活動の表彰なども入っている。それがまさに自治推進委員会の大きな根幹を成す仕事ではないかくらいに思っていたので、新鮮な思いで意見を聞いた。

（委員）

委員の表彰も実際にされているが、役割の中にどこにもない。なし崩しにずっとされてきているので、役割だと思われているかもしれないが、募集の中にも役割と位置づけの中にもどこ

にも書いてない。
　こだわらないからされればいいと思うが、平成２０年に配られた役割のときには、表彰なんてどこにもない。やはり表彰は市長が行うのでしょう。

（委員）
　表彰ではなく、それが誰かを選ぶものである。

（委員）
　調査なので、選ぶのはいいと思う。

（委員）
　選んで発表する場がフォーラムの場所なので、自然な流れだと思っていた。

（委員）
　片山知事が、議会と知事が一緒になると、車の両輪がくっついてしまって、車がひっくりかえってしまうという例をよく言っていたが、それとはちょっと違うのだろうか。やはり少し間を置かないといけないのではないか。それなら調査も審議も必要ではなく、どうぞ市長さんやってくださいとなる。

（委員長）
　今年度新しく委員になられた方もいらっしゃるので、今までフォーラムでどんなことをやってきたのか、あるいは実行するにあたって組織がどういう組織だったかを簡単に説明していただいたほうがいいと思う。

（事務局）
　平成２０年度から開催しており、事例発表や地域のものを見ていただくということで、アトラクションを盛り込んだこともある。その中の市民活動表彰は、次回のこの委員会で皆さんに審査していただくものだが、こういった表彰の場としても、このフォーラムで行ってきている。以前は事例発表をしていたが、趣向を変え、平成２３年度にはパネルディスカッションも行った。平成２４、２５年度は市民活動フェスタと合同だったので、市民活動フェスタがメインのように見えるが、その中にもパネルディスカッションを組み込んでやってきている。
　平成２６年度の単独開催時も同じように市民活動表彰もあり、アトラクションも地域の方に出ていただいた。
　パネルディスカッションについては、どうしても中山間地域における様々な課題というのがどことも同じようにあるので、中山間地域に特化した形でパネルディスカッションのテーマに据えて開催したものである。
　平成２０年度当初から、この主催というのは、このフォーラムの実行委員会、そして市民自治推進委員会、鳥取市の三者ということで進めてきている。先ほど委員さんからもお話があったが、いろいろな考え方があり、市は市の考え方でやってきてはいたが、それが１００％だとは思っていない。主催者というのは最初に出てくるものでもあるし、ご意見を伺って、委員さんにも諮りながら、今後に反映させていきたいと思う。
　委員さん個人で入っていただく分には差支えないのではないかというお話しをいただいたが、

実行委員会を立ち上げることについては変わりがないかと思う。委員さん個人の形になるのかもしれないが、この実行委員会に入っていただくということについてはいかがか。

（委員）
　審査が私たちの仕事のようなので、完結まで私たちがするのは、自然だと思う。

（委員）
　審査はそう思う。
　去年、鹿野で行われたフォーラムをケーブルテレビで見た。実際に開催された時期よりもだいぶ後の年を越してからだった。イチゴを作っている人のことだけが頭に残ったが、なんだかばらばらな話で、虚しいフォーラムだった。結局何が今回の成果として残ったのかと思った。行財政改革委員もしているが、財政のほうと思いは多分同じなのだと思う。

（委員）
　去年のフォーラムで、このパネルディスカッションをしたというのは、中山間地域で活動されている若者がどういう活動をされているかというのを、それぞれの立場で言ってもらって、それが今後の活動に繋がったらいいのではないかという話だと思う。

（委員）
　それぞれの活動はお聞きしたが、それが協働とどう関わりがあったのか。

（委員）
　藤原さんの話と一緒だと思うが、地域に根ざした活動が、協働のまちづくりやそういう地域づくりにつながったらいいんじゃないかという感じに持っていこうとされたんだと思うが、確かにさびしい感じはした。

（委員）
　私も去年初めて出させてもらったが、この自治推進委員会と実行委員会とは看板が違っていて、委員会委員の中にも入るし、実行委員の中にも入るというような感じで受け止めて、実施してきた。気高や鹿野、青谷の地域からも委員さんが出て、一緒になってこの実行委員会を運営してきた。

（委員長）
　基本的には、この委員会は市長の諮問に応じて、市民自治に関する調査や審議をしていただいたり、自治基本条例の運用や見直しを皆さんで協議、審議して市長に答申をするところである。しかし、地域の課題を地域コミュニティ、あるいはＮＰＯなどできるだけ市民の皆様に積極的に対応していただきたいということで、地域ごとに出かけて行って、できるだけ多くの地域の活動団体に事例発表していただいたり、関心のある方に多く集まっていただいたほうが、この自治推進委員会の狙いにしている地域の自治活動の調査にもなるのではないか、あるいは地域の把握になるのではないかというようなことでやってきたのだと認識していて、鳥取市市民自治推進委員会条例の第２条第３号に該当するのではないかという捉え方できている。ただ、平成２６年度は、鹿野で開催して、天候のせいもあったのだろうが、非常に参加者が少なかっ

た。財政当局の査定で、効果的にはどうかという判断ではなかったかと思う。参考までに、毎年度やってきたときの予算は、フェスタと合同でやったとき、単独でやったときとほとんど変わらない。フェスタは６００人から８００人の大変大きな規模だが、自治活動についてのディスカッションや参画者に向けての啓発ということに加えて、いろいろな地域活動をされている団体がある。任意団体やテーマコミュニティに取り組まれているＮＰＯ法人といった方々が、ＰＲのためのブースを設けてたくさん参画されているが、単独でやった時はそういうことはしていない。活動されている団体のパネルや資料でのＰＲはしているが、団体の活動をフェスタほどＰＲするコーナーはない。またフェスタではバザーを大々的にやっている。どちらかというと、バザーでいろいろなグルメも楽しみたいということもあって、確かにフェスタのほうが人数的には多かったということである。

河原町で開催した時は、１６０名くらい集まっていただいたが、地域活動をされている方や関心のある方、公民館で活動されている方が集まっていただいた。佐治や河原で活性化に努めている方は、意外に県外の方が多くて、地域の資源に魅力を感じて、地域活性化のためにコミュニティ活動を積極的に展開されているということで、熱気でむんむんするほどだった。

単独でやった時のほうが、自分たちの地域は自分たちで解決していこうということで、地域のさらなる課題解決に向けての取り組みの啓発に寄与していただいたんじゃないかと思う。そういった意味で、鳥取市と地域の方とを含めて三者が合同の実行委員会という形で、具体的に言えば、会場借り上げやＰＲのためのチラシ・ポスター等の予算措置を市で協力していただいている。そして地域の人には、そういったことに向けて、地域ごとで代表者の方を選んで参画していただく。委員会のほうでも受け付けや会場整理などを手伝った。三者合同の実行委員会方式でやったということである。性格的には、我々のミッションである自治の推進に関する調査の一環というように捉えてきている。

その他、単独でフォーラムをやるべきかといったことの前提になるので、意見をいただきたい。

今日のこのフォーラムの協議については、大筋の取り扱い方の意見交換をさせてほしいということなので、来年度については、従来どおり実行委員会方式で、地域活動の掘り起しを調査するというような考え方で単独でのフォーラム開催という方向で考えさせてもらいたいと思うが、いかがか。

大筋はそういうことで、進めさせていただく。

今後のスケジュールについて、事務局で説明をお願いする。

《事務局説明》

（委員長）

ただいま事務局から資料３のスケジュールの説明があったが、何かご意見があれば、お聞かせいただきたい。

来年度は鳥取地域で考えているというのは、東部地域、南部地域、西部地域を一巡したので、元に戻ろうかという考え方のようである。具体的な内容は、予算が認められてからになるが、早めにこの実行委員会で詰めていきたいということである。来年の１月、３月の自治推進委員会の開催に合わせて、実行委員会も効率的にやっていこうという考えだが、来年度の予算議会は２月頃だろうに、議会の可決の心配はしなくてもいいのか、先行してやるような感じになるのは問題ないのか、その辺の説明をしてほしい。

（事務局）
　もちろん議決されないと、予算がつくかどうかは当然確約できないが、合同開催含めて毎年開催をしてきていて、今年度は財政的なこともあって、開催ができていない。財政からは、フォーラム自体を無くすという考え方ではなく、見直しを含めて検討するという意味合いで受け取っているので、フォーラムが単純に無くなったという認識ではない。前回の参加状況等も踏まえて検討した上で、来年度開催ということで要求していきたいと思っている。単純に、今年予算がつかなかったから来年も予算がつかないということではない、という認識で予算要求していきたいと思う。同時並行になるかと思うが、予算の議決を待っていて、準備が間に合わないということは避けたいと思っているので、進めていけたらと思う。

（委員長）
　事業を来年度の５月から７月に開催ということで、従来のフェスタも含めて考えると、ずいぶん早めるが、早めに開催したほうがいいという考え方はどういうところからか。

（事務局）
　単純に春夏秋冬と分けると、秋はイベントシーズンで、地域でのイベントも多い。いろいろなイベントが毎週のように開催されている時期ではないかと思う。見に行くだけのイベントであれば特段問題はないだろうが、地域の方が総出で準備されるようなイベントも、どうしても秋口に多いように感じている。自分たちの大きなイベントが終わってやれやれというところに、次はこういうものがあるといっても、なんとなく足が遠のくのではないかという印象を持ったので、時期を変えてみるというのも一つのやり方ではないかということである。これに限定しているわけではないが、この時期は、イベントが立て続けに行われるような時期ではないように思い、今回は早めに設定してはどうかという提案をしたものである。

（委員長）
　今までの経験でも、単独では、割と秋というか１１月頃の開催が多い。中には寒い冬もあったが、１０月１１月頃は、各地域での行事があり、土日は地域ごとのいろいろな行事が集中しているように思う。事務局のほうでも会場を押さえるのに大変苦労されたことは承知している。そういうこともあり、来年度は早めの土日に、地域の皆さんに集まっていただきやすいように、あるいはパネラーの皆様も参画していただきやすいように、予算が通れば早めに開催したほうが日程調整もしやすいという考えのようである。
　開催時期については、特に異論ないか。今日は大筋の話なので、細かなことは今後の委員会で詰めていくわけだが、来年度のフォーラム開催に当たっては、各地域一巡したということで、旧市内でやるということで、開催時期は、予算が前提ではあるが、来年度の早めにということで、５月はちょっと無理かもしれないが、６月か７月頃のあまり地域の行事と重ならないような頃に設定して開催するということで、大筋ご了承いただけるか。
　これも予算が通らなければできない話だが、それを念頭に置いて、事務局には頑張って予算要求をしっかりとやっていただこうと思う。
　次回の委員会の日程等について、事務局から説明をお願いします。

（事務局）

第４回の委員会は、市民活動表彰の被表彰者の審査と「参画と協働のまちづくりフォーラム」についてということで協議を進めたいと思う。開催は１０月下旬から１１月上旬ということでまた改めて日程調整の依頼を出させていただく。

（委員長）
次回の開催日程等も、予め委員の皆さんに日程調整が入ると思うのでよろしくお願いしたい。
他に、委員の皆さんから確認事項等なければ、本日の第３回委員会はこれで終了します。ご苦労様でした。

５　閉会　12：25